

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Comparative Analyses : Results : Hunting 1100

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秋道, 智彌 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003669

Ⅱ. 大項目別報告

狩 猟 1100

秋 道 智 彌*

- | | |
|---------------|----------|
| 1. 狩猟技術の地域差 | 3. 狩猟と儀礼 |
| 2. 採集・狩猟から農耕へ | 4. おわりに |

1. 狩猟技術の地域差

サンプル民族 237 のうち、何らかの狩猟技術 (1101~1109) をもつものは、全体の約76%にあたる 180 である。狩猟技術として多用されているものを順にあげると、槍 (97), 弓矢 (90), わな (77と71), 網 (58), おとし穴 (56), 吹矢 (35), 毒矢 (33), 投げ棒 (13) のようになる (かっこ内は使用民族数)。

東南アジアとオセアニア地域とでは、上記にのべた狩猟技術の種類分布は均一ではけっしてない ($p < 0.005$)。オセアニアでは、4種類以下の狩猟技術をセットとして有する民族が、オセアニアのサンプル民族中、97%を占める。これにたいして、東南アジア地域では、大陸部、島嶼部の区別にかかわらず、1民族で5種類以上の狩猟技術をもつものの数が40%以上に達する (表1)。

つぎに、狩猟具の種類に注目してみよう。東南アジア全体で、槍のほうが弓矢よりも多くみられる。そして、大陸部で弓矢が顕著に多くみられる一方、島嶼部では槍が優先する ($r = 0.78$, $p < 0.05$)。オセアニアでは、弓矢と槍がともに多くみられる。ただしこの傾向はオセアニア全域にあてはまるというのではなく、メラネシア的といつてよい。そして、ミクロネシア、(フィジー以東の) ポリネシアには、槍、弓矢がほとんどみられない (Maori は例外で槍がある)。かわりに、ポリネシアでは網とわなが主流であり、弓矢のないオーストラリアでは、投てき用の槍や投げ棒 (ブーメラ

* 国立民族学博物館第1研究部

表1 東南アジア・オセアニアの民族別にみた狩猟技術数の分布

狩猟技術 の数	東南アジア		小 計	オセアニア	合 計
	大陸部	島嶼部			
1~4	24	34	58	65	123
5~8	15	24	39	2	41
合 計	39	58	97	67	164

数字は民族数をあらわす

東南アジアとオセアニア : d.f.=1, $\chi^2=29.28$, $p<0.005$

東南アジアの大陸部と島嶼部 : d.f.=1, $\chi^2=0.08$, $p>0.1$

ンとウーメラ) がそれぞれ特徴的にみられる。

もう少し個別の狩猟技術について、特徴的な分布を指摘しておこう。吹矢はマダガスカル島とマレー半島からボルネオ、スラウェシ、ミンダナオ島を中心とした東南アジア島嶼部にかけてのヘスペロネシア系民族で多くみられる。吹矢をもつ35民族のうちほとんどは、水稻ないし陸稻を栽培する農耕民である。米を栽培しないのは、Semang, Central Visayan, Palau, Hawaii の5例である。Semang のようにかつての採集・狩猟民でも、吹矢を周辺の Senoi や Jakun から導入したという歴史的事実があるように、吹矢は東南アジア島嶼部の稲作農耕民による狩猟の典型的な道具とみなすことができる。

毒矢は東南アジアが中心で(33例)、オセアニアには4例しかない。毒の利用という観点から毒矢(1102)と魚毒(1212)の利用とのかさなりを検討すると、両者を用いる民族は意外とすくない。ただし、Semang, Sakai, Jakun などは、野生のヤマイモを吹矢毒(*Dioscorea hispida*)や魚毒(*D. piscatovum*)として用いることが報告されている[BURKILL 1935]。野生のヤマイモの利用を中心とした毒文化(毒矢と魚毒)の分布圏が、マレー半島から東南アジア島嶼部にかけて設定できる可能性がある。

このほか、はねわな(1107)、くくりわな(1108)、おとし穴(1106)といったように、一定の場所に固定しておく狩猟技術は、高密度ではないにしろ東南アジアの大陸部を中心に比較的ひろい分布をしめしている。

以上の傾向を端的にのべると、東南アジアの大陸部から島嶼部、そしてオセアニアといった地域的なひろがりのなかで、一民族の有する狩猟技術の種類数は、西に多く東に少ないという傾向がある。個々の狩猟技術についてみると、わな、網、弓矢のように全域、ないしかなり広範囲にわたってみられるものと、吹矢、毒矢、投げ棒などのように分布が地域的に限定されるものを区別することができる。

2. 採集・狩猟から農耕へ

採集・狩猟民(1113)として記載されているのは、20民族である。しかし、これらの民族を採集・狩猟民としてひとくくりにとりあつかうことには若干の問題がある。すなわち、採集・狩猟民社会が何らの社会的変化もなく、この数千年、存続してきたわけではけっしてないし、現代におけるように(19世紀以降としても)いちじるしい外的要因がくわわったと考えられるからである。以下、いくつかのコメントをふくめてこのことを考えてみよう [cf. BARNARD 1983]。

20例のうち、すでに農耕をおこなうものが多くある。内訳は、水稻栽培(1310)をおこなうもの8例、焼畑耕作(1312)をおこなうもの11例、サツマイモ栽培(1304)をおこなうものが10例である。そのほか、オカボ栽培(4例)、タロイモ栽培(4例)、料理バナナ栽培(6例)の例をさしひくと、採集・狩猟民とよばれる民族数はわずかとなる。さらに、東南アジア、オセアニアの低地で重要なサゴヤシ澱粉の採集例(4例)を除去すると、のこるのは Andamanese, オーストラリア・アボリジニ, Tasmanian だけになる [cf. MEGGITT 1962; 渡辺 1978]。

上記の20民族にはふくまれないが、かつて採集・狩猟民であった諸民族について若干のべておこう。フィリピンのルソン島、ミンダナオ島および周辺のネグリート諸族、ラオスのピー・トン・ルアン族、マレー半島の Semang などの民族は、かつて採集・狩猟民であり、農耕民化した例としてしられている [LEE and DeVORE 1968; 大林 1984a; 清水 1984]。一方、逆に、農耕民が採集・狩猟民化したボルネオの Penan といった特殊な例がある。

これとは別に、サゴヤシ採集と狩猟活動をくみあわせた生計をおこなうニューギニア低地の諸集団に注目しておこう。わずかな規模の焼畑農耕をおこなうだけで、主要なエネルギー源をサゴヤシに依存し、狩猟(と漁撈)にタンパク質を依存する集団は、純粋な意味で採集・狩猟民とはいえないかもしれない。しかしながら、サゴヤシ澱粉の採集が農耕というより採集的であることから、過去においては、移動生活を基盤としたサゴヤシ採集・狩猟民社会が存立した可能性は大いにある。この点でネグリート諸族やオーストラリア・アボリジニとは異なった形で環境に適応した採集・狩猟民の存在を提起しておきたい。具体的には、ニューギニアのフライ川、セピック川、プラリ川流域の低湿地帯に居住する諸民族がこれにあてはまる [OHTSUKA 1977; TOWNSEND 1980]。

3. 狩猟と儀礼

狩猟は、食料獲得や食料以外の利用（羽毛、皮、歯、薬）、あるいは農耕民に特徴的な害獣駆除を目的としておこなわれるほか、特定の文化的・社会的価値や宗教的観念とむすびついた形でおこなわれることがある [cf. BULMER 1969]。下顎骨の保存(1110)、儀礼的狩猟(1111)、王侯の狩猟(1112)がそれらを考察する材料となる。

下顎骨の保存とは、いうまでもなく狩猟によって獲得した動物、とくに野ブタのものを保存する習慣であり、ニューギニアのパプア系諸族にもっとも密に分布する。このほか、ニューヘブリディーズ諸島、フィリピンの山地民、カリマンタン、台湾、大陸部のナガ諸族、Akha、海南島のLi、スマトラ島南西の島々というように、分布は一樣であるというよりむしろ散漫であるようにみうけられる。下顎骨を保存する目的には、捕獲した動物の数の誇示と社会的地位の獲得、通貨、狩猟儀礼のさいの呪物、祖先崇拜、といったさまざまな理由と解釈が可能である。下顎骨を保存する習慣をもつ37社会のうち、儀礼的狩猟をおこなうものは14例あり、これらは東南アジアの島嶼部に散在する形で分布している。とくに焼畑農耕社会における豊穰儀礼としておこなわれる場合が多くふくまれている。一方、オセアニアでは、ニューギニアの高地周縁部の2例とニューヘブリディーズ諸島 Malekula の例のみで、下顎骨の保存がかならずしも儀礼的狩猟とむすびついていない。そして、すくなくともニューギニアの2例では、祖先崇拜と焼畑農耕の豊穰儀礼とむすびついた形で儀礼的狩猟がおこなわれる [BARTH 1975]。

一方、儀礼的狩猟をおこなう民族22例のうち、王侯の狩猟がみられるのは東南アジアの王権文化のみられる4例にすぎない。儀礼的狩猟としてあつかったものは、以上みたように東南アジアの王権とむすびついた場合と、祖先崇拜と焼畑農耕を基盤とする部族社会における場合とにわけて考える必要がある。

4. おわりに

東南アジア・オセアニアにおける狩猟の問題は採集・狩猟と農耕という人類にとって重要な生活様式とその歴史の変遷について再考するうえで重要な契機になることはまちがいない。

このほか、狩猟が、たとえば戦闘、首狩り、動物・人身供犠といった他の文化的事象とどのような関係をもっているのかといった問題がのこされているが、当該の項目

の下に議論されるとおもわれるのでここではのべない。しかし、東南アジア大陸部のナガ諸族、カリマンタンの **Dayak**、台湾の高砂族、ニューギニアの低地民・高地民におけるような焼畑農耕民として首狩りと狩猟をおこなう場合と、東南アジアやポリネシアにおける王国においておこなわれる狩猟と人身供犠の問題を相互に比較することには興味がある。